音楽部会　研究の構想

令和４年度～

Ⅰ　研　究　主　題

幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。

Ⅱ　主題設定の趣旨

平成30年度からの４年間は、「幅広い音楽活動を通して、『音楽的な見方・考え方』を働かせ、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか」を研究主題とし、音楽科が育成を目指す資質・能力の三つの柱「⑴ 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付ける（生きて働く「知識・技能」の習得）、⑵ 音楽表現を創意工夫することや音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）、⑶ 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」に基づき、研究を進めてきた。これまでに、育成を目指す資質・能力を身に付けさせるための教材選択や指導の展開、「音楽的な見方・考え方」を働かせる学習指導を工夫した授業づくりの推進に努めてきた。

学習指導要領では音楽科で育成を目指す資質・能力を、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と規定している。これらを育成することは、生徒がその後の人生において、音や音楽、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むことにつながる。そのため、授業で学んだことやその際行った音楽活動と学校内外における様々な音楽活動とのつながりを生徒が意識できるようにするとともに、「生活や社会における音楽の意味や役割」や「音楽の共通性や固有性」について考える学習を充実させることが求められる。

そこで本研究主題に「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化」を明記し、令和４年度からの３年間は、目標の趣旨を踏まえ、主題解明に向けて研究を進めていきたい。

Ⅲ　研究のねらいと内容

１　研究のねらい

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するため、これまでの研究成果や課題を整理し、生徒の実態を踏まえながら、継続的な研究を通して主題を解明する。

２　研 究 内 容

⑴　学習指導の工夫

・「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実
・必要性を実感できる知識や技能の習得を目指した指導の工夫
・音楽科の特質に応じた言語活動の充実
・協働的な音楽活動の充実と学習形態の工夫
・音や音楽と生活や社会との関わりを実感できる指導の工夫
・ＩＣＴを効果的に活用した指導の工夫

⑵　指導計画作成の工夫

・「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画の作成
・題材などの内容や時間のまとまりを考慮した指導計画の作成
・〔共通事項〕の適切な位置付けと、〔共通事項〕を要とした各領域や分野の関連付け
・指導のねらいを実現するための適切な教材選択

⑶　指導に生かす評価と学習状況を記録に残す場面・方法の工夫

・指導に生かす評価の充実
・育成を目指す資質・能力を明確にした評価の工夫
・ＩＣＴを活用した生徒の学習記録の累積
・自己評価や相互評価等、生徒が学びを実感できるような評価の工夫
・個に応じた指導の充実を図ることのできる評価のＰＤＣＡサイクルの構築

音楽部会　令和５年度研究計画

Ⅰ　研　究　主　題

幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。
－生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育む授業づくり－

Ⅱ　主題について

昨年度は、「主体的・対話的で深い学び」に焦点を当て、「音楽的な見方・考え方」の習得・活用・探究という学びの過程の中で、思考、判断し、表現する一連の過程を大切にし、より質の高い深い学びを実現できる学習指導の工夫について研究を進めた。授業においては、ＩＣＴの活用による活発な音楽活動の実現、授業者による教材開発やデジタルコンテンツの活用、生徒が自分のイメージを実現するための楽器選択等、学習意欲を高める取組が見られた。しかし、表現に必要な技能の習得と、創意工夫を生かした表現活動とのバランスに課題が見られた。また、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションの充実や、より生徒の考えを深める支援や働きかけについては、今後さらなる充実が求められる。

音楽科における「資質・能力」を育成するには、様々な音や音楽、音楽文化が、日々の生活やその生活を営む社会に直接、間接に影響を与えていることを意識できるような学習活動を展開する必要がある。これにより、実感を伴った理解による「知識」の習得、必要性の実感を伴う「技能」の習得、質の高い「思考力、判断力、表現力等」の育成、人生や社会において学びを生かそうとする意識をもった「学びに向かう力、人間性等」の涵養が実現する。これらを実現するためには、音楽科の学習が、その後の学習や生活とどのように関わり、どのような意味や価値をもつのかということに生徒が意識を向けることのできる授業づくりを目指して研究を進めることが大切である。そこで、研究の副題を「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育む授業づくり」とした。

Ⅲ　研究内容とその視点

１　学習指導の工夫

⑴　「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実を図る。
・ねらいを明確にし、学習課題を明示するとともに、終末ではその時間の学習課題の達成が実感できるようなまとめや振り返りの活動を行う。
・思考、判断し、表現する一連の過程を大切にした板書や発問、ワークシート等を工夫する。

⑵　必要性を実感できる知識や技能の習得を目指した指導の工夫を図る。
・思いや意図との関わりを捉えられるようにしながら、発声、奏法、身体の使い方等の指導を行う。
・他者や他の声部、全体の響き等を意識して、他者と合わせて演奏するよさや必要性を感じながら技能を身に付けることができるよう指導を工夫する。

⑶　音楽科の特質に応じた言語活動を位置付け、音や音楽によるコミュニケーションの充実を図る。
・音や音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図等を相互に伝え合う活動と、音や音楽で伝え合う活動をバランスよく融合させる。
・実際に音や音楽で表現したり、聴いて確かめたりするなどして、言葉で表したことと音や音楽との関わりを捉えられるよう指導を工夫する。

⑷　知覚・感受したことを、他者と共有したり共感したりする協働的な学習の場面を設定するなど、「主体的・対話的で深い学び」につながるよう学習形態を工夫する。
・ねらいに即したペア・グループ学習を効果的に取り入れる。
・体を動かす活動を行う際は、音や音楽、言葉等で表すことと組み合わせながら、目的に応じて効果的に取り入れるよう工夫する。

⑸　音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう指導を工夫する。
・自然音や環境音等について取り扱い、音環境への関心を高める。
・取り扱う教材と学習内容とを適切に関連付ける。
・音楽が果たす役割を感じ取ることのできる教材を適切に選び、それを考えさせる授業を行う。

・震災復興支援曲やポピュラー曲等の音楽にも目を向け、社会とのつながりをもち、生涯にわたって様々な音楽と向き合うことができるような学習指導の展開を工夫する。
・学びを学校内外の音楽活動に生かす場面を想起したり、振り返ったりする活動を取り入れる。

⑹　ねらいを明確にして、ＩＣＴを効果的に活用できるよう指導を工夫する。
・楽譜を拡大、分割しながら提示したり、楽器の演奏方法を動画で確認したりすることで、聴覚や視覚等、他の感覚とも関連付けて音楽への理解を深められるようにする。
・話合いにおいて、各自の考えを即時に共有したり、多様な意見に触れたりすることで、対話的な学びを促進する。
・自分たちの演奏や作品を録音や録画で残すなど学習履歴を蓄積し、学習の振り返りや学習成果の確認に生かす。

２　指導計画作成の工夫

⑴　「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画・指導案を作成する。
・学習の見通しや振り返りを通して、自身の学びの変容を自覚できる場面を設定する。
・対話によって自分のイメージを広げたり、思いや意図を深めたりする場面を設定する。
・学びを深めるために、生徒が考える場面と教師が教える場面をバランスよく設定する。
・見通しをもって学習に臨むことができるような指導と、学んだことが自分自身にとって価値があると感じられるような振り返りの場面を工夫する。

⑵　題材等、内容や時間のまとまりを考慮した指導計画を作成する。
・小学校や前学年までの学習を踏まえて、３学年間を見通した指導計画を作成する。

⑶　〔共通事項〕は、「Ａ表現」及び「Ｂ鑑賞」の指導と併せて、十分な指導が行われるよう適切に位置付ける。
・必要に応じて、〔共通事項〕を要として各領域や分野の関連を図る。
・生徒の思考・判断のよりどころとなるものとして、主な音楽を形づくっている要素を適切に選択する。

⑷　指導のねらいを実現するために適切な教材を選択する。
・生徒にとって親しみをもつことができたり意欲を高めることができたりする教材を選択する。
・生活や社会において音楽が果たしている役割を感じ取ることができる教材を選択する。

３　指導に生かす評価と学習状況を記録に残す場面・方法の工夫

⑴　生徒の学習状況を常に把握し、それを基に学習を充実させていくなど、指導に生かす評価を行う。

⑵　育成を目指す資質・能力を明確にし、各題材や各時間に位置付け、適切な場面、方法で評価を行う。

⑶　ＩＣＴ等の活用やワークシートの工夫を図り、授業の中で計画的・継続的に評価を行い、生徒の思考が深まっていく過程を記録できるようにする。

⑷　生徒による自己評価、相互評価を行うなど、生徒が学びを実感できるように評価の方法を工夫する。

⑸　学習指導の在り方を見直すことや、個に応じた指導の充実を図ることのできる評価のＰＤＣＡサイクルを構築する。

Ⅳ　研　究　方　法

１　学習指導要領の趣旨等の理解を深め、研究の継続と累積に努める。

２　各郡市内や郡市間での研究体制を整え、日々の授業実践を基に、協同研究を推進する。

３　教師自身の感性を磨き、指導力及び授業の分析・考察する力の向上を目指して積極的に研修を行う。

⑴　様々な研修会等に積極的に参加し、目指す資質・能力を育成する方法や技能をより一層磨き、指導力を高める。

⑵　授業や評価に関する技能向上のため、充実した学習会や協議会を企画・運営する。

⑶　授業に関する資料を持ち寄ったり、新しい教材の紹介や地域の人材に関する情報交換を行ったりするなど、教師間の連携を密にする。